



センターからのお知らせ

◆環境学習フェスタ開催結果◆

2月20日土曜日に「霞ヶ浦環境科学センター環境学習フェスタ」を開催いたしました。あいにく午後から雨がちらつきましたが、来場者は1,400人という過去最多の人数で盛大にイベントを終了することができました。今回は新たな取り組みとして、東レ株式会社と



コラボしたサイエンスラボや、子どもの興味を引くイベントブースを多く出展し、来場者到大変好評な様子でした。また、センター事業の運営補助や自主活動への積極



的な取り組みに対するパートナー表彰では、内田さん、杉山さん、高崎さん、三橋さんの計4名に感謝状が贈呈されました。御協力いただきましたパートナーの皆様、この場を借りて感謝申し上げます。

左から順に杉山、内田、相崎C長、高崎、三橋の各氏

(センター 渋谷)

◆ビオトープ「いきもののにわ」を再整備しました！◆

センタービオトープ「いきもののにわ」の防水シートが破れ再整備の必要ができたため、2月23日から3月12日にかけて、センタービオトープ「いきもののにわ」の再整備を行いました。職員とパートナーのみなさんのご協力によって、完成させることができました。紙面をお借りしてご協力頂いたみなさまにお礼申し上げます。3月5日(土)には、一般の参加者も交えたイベントとして「ビオトープづくりワークショップ」を開催しました。日本ビオトープ協会関東地区委員長の砂押一成氏を講師にお迎えして、掘った穴に防水シートを入れ、土留めとなる木枠を組み立て、土で防水シートと木枠を押しえました。ワークショップでは、ビオトープに関する講義も行われました。霞ヶ浦流域は、植物の絶滅危惧種の多い場所です。当センターには、自然界絶滅となってしまったオニバス、ジョウロウスゲ、アサザなどの貴重な植物があります。これらの植物を観察できる場として、保存する場として活用していきます。



(センター 富田)

◆平成 27 年度後期「霞ヶ浦湖岸植物同好会」活動の報告◆

今年度の課題：第Ⅱ期自然再生事業予定地H区の悉皆調査、B区再生地を重点に全区で絶滅危惧種等の経過観察。



10月K区サンショウモ(サンショウモ科) 11月A区センニンソウ(キンボウゲ科) 12月K区タンキリマメ(マメ科)
浮遊性シダ植物の1年草。孢子で繁殖。実の白い毛を仙人の髭に見立てた名。関東以西に分布し県絶滅危惧Ⅱ類。



1月E・F区セイタカヨシ(イネ科)多年草 2月K区オニグルミ(クルミ科)落葉樹 3月G区ノウルシ(トウダイグサ科)
北限地域で県準絶滅危惧種。 果実が水で運ばれ湖岸にも多い。 多年草。国県準絶滅危惧種。

月/日	観察区	湖岸植物観察概況 (EN:絶滅危惧ⅠB類、VU:絶滅危惧Ⅱ類、NT:準絶滅危惧種、特外:特定外来生物)
10/14	AB	A区低地でサクラタデやシロバナサクラタデが満開。B区低地はツルマメが繁茂しタコノアシ(NT)が熟す。
	EFGH	H区低地は7種のイヌタデ属の花が満開。E区でミツバアケビの果実が裂開、セイタカヨシ(県NT)が開花。
	KL	K区法面でツルウメモドキの実が熟す。堤脚水路にサンショウモ(国VU県EN)出現、堤内でコナギ新出。
11/11	AB	晩秋のA区湖岸、センニンソウが果実に白い毛を付けていた。B区でイタチハギ、ハトムギを新たに観察。
	EFGH	H区法面でミモチスギナ発見。キショウブの種子散布を観察。E区ビナンカズラの集合果が見事に熟した。
	KL	ハゼノキ、ヌルデなど湖岸の木々は紅葉が始まる。タンキリマメ(県VU)の赤い莢果が裂け黒い豆が見える。
12/9	AB	ヨシやオギの葉は枯れ種子を散布中。日当りの良い法面ではオオイヌフグリ、ホトケナザが開花している。
	EFGH	ミゾソバの紅葉。アカメヤナギは落葉したがジャヤナギは上部にカワヤナギは全体にまだ緑色の葉が残る。
	KL	イヌコリヤナギはまだ緑。タンキリマメ(県VU)がK区に出現。堤内でハルジオンやヤハズエンドウが開花。
1/13	AB	弁天様の土手でオドリコソウが葉を広げる。B区水際にカンエンガヤツリ(VU 県 NT)、タコノアシ(NT)の枯れ姿。
	EFGH	H区ヨシの間のドクゼリが黄色葉で残る。法面のセイタカヨシは全体が緑色、竹林の様に群生して目立つ。
	KL	ヒメカジイチゴが紅葉。法面で赤や緑色のスイバのロゼット。堤内アサマスゲ(NT 県EN)の地上部が枯れた。
2/10	AB	A区水路で分かれたドクゼリの塊茎に新芽。サジオモダカ(県NT)は水中に新葉。セイヨウタンポポ開花。
	EFGH	H区沖合から再生工事開始。E区でタブノキの冬芽、ヒラギの雄花、アオキの蕾。セイタカヨシが枯れた。
	KL	オニグルミ、ヌルデ、フジなどの冬芽・葉痕を観察。L区堤脚水路のオオフサモ(外特)は水中で越冬。
3/9	AB	A区南小池にサジオモダカ(県NT)の実生。ドクゼリの若葉が育つ。B区水際の小さなオノエヤナギ開花。
	EFGH	F区のカワヤナギ♀が満開。E・G区でノウルシ(国県NT)が伸び出しマユミが芽吹いた。スイバに蕾が付く。
	KL	ヒメカジイチゴの冬芽が動き出した。オノエヤナギ♂が咲き出した。ツルズズメノカタビラ、ナズナが満開。

(パートナー 有吉)

●読み聞かせ活動の紹介●



活動日はセンターイベント開催月を除く毎月第4土曜日（平成28年度も同じ）で、活動体制は原則2名以上です。聞いてくれるお客さんは、幼稚園児から小学校低・中学年児童とその父母が中心です。お客さんは毎回3名～6名程で、聞いてくれたお客さんにはパートナー手作りの「しおり」をプレゼントしています。また、平成27年度からお客さんの増加を目指してマジックを取り入れています。

（パートナー 浅野）

●平成27年度「パートナー霞ヶ浦クリーンup自主活動」報告●

平成23年から環境保全の一環として、「きれいな霞ヶ浦を目指す」をテーマに、身近に関わりのある霞ヶ浦湖岸の清掃をパートナー自主活動として始めてから今年で5年目になります。活動範囲は、センターの下2.3kmの湖岸を月1回の頻度でセンターの協力を得ながら実施しております。対象者はセンターパートナー有志で、9時にセンターに集合し、湖岸で2班に分かれゴミの回収作業を約1.5～2時間程度実施します。その後、センターで分別作業を行い回収量、参加人員を記録し解散となります。

平成27年度の活動実績は、総回収量：37袋（40L用ビニール袋）で内訳は可燃物20.5袋、不燃物16.5袋、延べ参加人数は40人、総回収量は重量換算すると約60kgになります。回収量は年々減少傾向にありますが、残念ながらまだポイ捨てが多いのが現状です。

暑さや寒さにもめげず活動しているせいか、最近は釣り人の皆さんから「ご苦労さん」と声を掛けてもらったり、ゴミを持ち帰ってくれたり意識の変化が見られ、嬉しい気持ちです。

今後も、限られた範囲での活動ですが、ポイ捨てしにくい環境づくりを進め、地道な活動を通し、皆さんに愛される「きれいな霞ヶ浦」を目指し、地域密着型の活動として定着できればと考えています。皆さんの参加をお待ちしています。

（パートナー 尾形）

◆身近な水環境の全国一斉調査活動の紹介◆

「身近な水環境の全国一斉調査」は香澄第4号（通巻42号）に紹介のとおり、全国水環境マップ実行委員会主催のもと、毎年6月5日の「環境の日」に近い日曜日に市民グループと河川管理者が連携して実施している調査です。

活動のねらい 全国で一斉に実施されますので、(1)調査に参加した人たちとの連携を深めることができる。(2)統一的なマニュアルに基づいて河川流域の多くの人たちが調査するので、面的につながりのある結果が得られる。との背景から、旧研修グループ自主企画活動「フィールドで水を覗いて感じよう！」の延長としてパートナー有志が参加しています。

調査の概要

調査日及び参加者数：平成25年6月2日（日）4名、平成26年6月8日（日）7名、平成27年6月7日（日）8名

調査内容・方法：統一調査マニュアルに基づく気温、水温、試水水温、パックテストによるCOD測定。

この他、特記事項として水辺の状況・流れ・濁り・散乱ごみ、川の変化について意見（今と昔）などの記入欄も有ります。また、平成27年の調査から透視度と電気伝導度（EC）の調査を加えました。

調査地点：平成25年～恋瀬川（恋瀬橋）、銚田川（旭橋）、平成26年～恋瀬川（恋瀬橋）、銚田川（旭橋）、桜川（水神橋）、平成27年～恋瀬川（恋瀬橋）、銚田川（旭橋）、桜川（水神橋）、花室川（精進橋）



調査結果

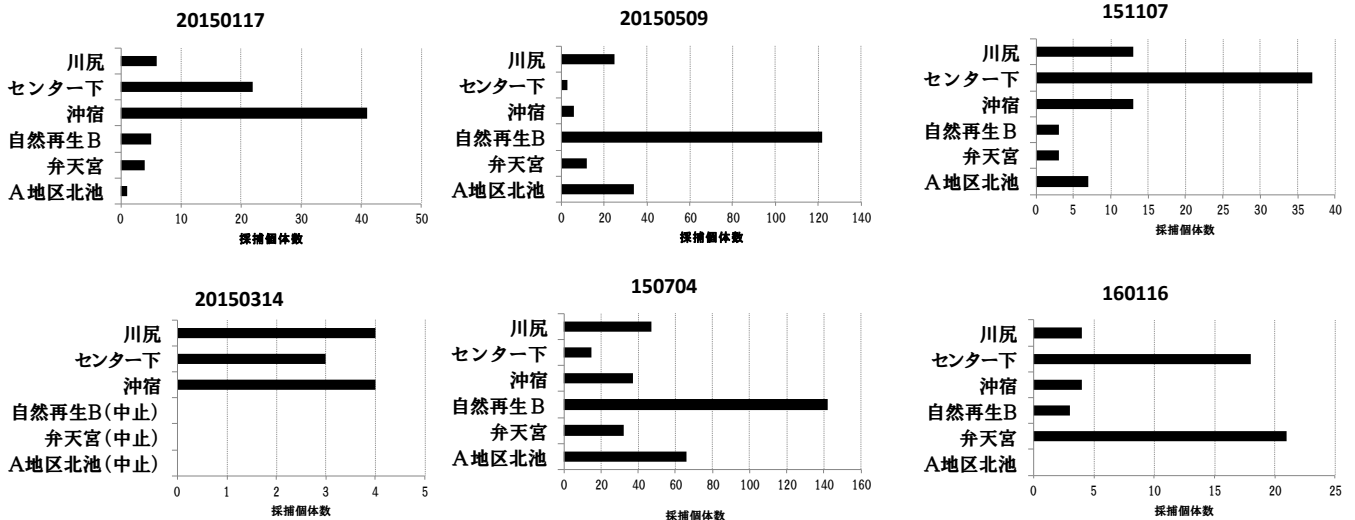
調査地点	調査年月日	天候	気温(°C)	試水水温(°C)	透視度(cm)	電気伝導度(ms/m)	COD測定値(mg/l)		
							1回目	2回目	3回目
恋瀬川 (恋瀬橋)	H25.6.2	晴	22	20	—	—	7	7	7
	H26.6.8	曇	20	17	—	—	7	7	7
	H27.6.7	晴	22	18	37	16.8	4	4	4
銚田川 (旭橋)	H25.6.2	曇	16	17.5	—	—	8以上	7	7
	H26.6.8	雨	21	19	—	—	8以上	8以上	8以上
	H27.6.7	晴	22.5	19	42	32.0	7	7	7
桜川 (水神橋)	H26.6.8	曇	21	18	—	—	7	7	7
	H27.6.7	晴	28	20	24	22.0	7	5	5
花室川 (精進橋)	H27.6.7	晴	24	20	41	22.5	6	6	6

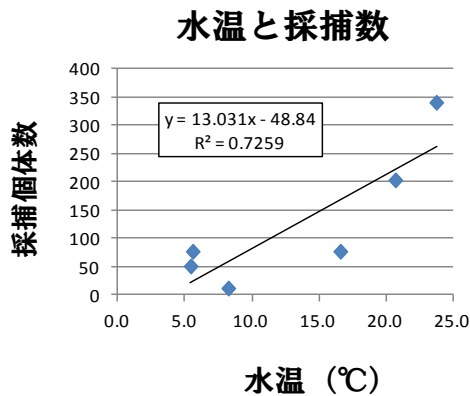
※調査結果は上表のとおりです。恋瀬川、桜川のCOD値はやや改善傾向にありましたが、銚田川のCOD値は横這い状態でした。花室川のCOD値は自主企画Part1～Part4の調査値と比較して良好な水質でした。(パートナー 浅野)

◆魚類等定点調査報告◆

パートナーでは魚類活動として、隔月で合計6地点において投網を用いた魚類等定点調査を実施しています。今年度から新しく若手(大学生)の方がパートナーとして参加され、特に投網を使用する技術的な魚類採捕に活躍されています。かつて当該調査は毎月実施されていましたが、平成26年度から隔月となり、さらに調査地点の数も少なくなったため、作業時間がかなり短くなりました。調査結果で特筆すべき点としては、以前はあまり見られなかったツチフキの数の増加があげられます。そして自然再生B地区が完成して未だ日も浅く、また川尻地点には湖岸近くに消波堤ができるなど、近年環境も変化しつつあります。今後とも継続的な調査が意義あるものとなるかと思われまます(写真は珍しい子持ちのメスのシラウオ)。

実施日	参加者(人)
2015/01/17	5
2015/03/14	8
2015/05/09	7
2015/07/04	8
2015/11/07	9
2016/01/16	5





(パートナー 新聞)

霞ヶ浦のサイエンス

● シリーズ 霞ヶ浦の魚たち 2. ハゼの仲間の産卵生態 ●

今回は、コイの仲間の産卵生態について話をいたしました。今回は、霞ヶ浦のハゼ類についてです。霞ヶ浦では、現在、ヌマチチブ、ヨシノボリ、ウキゴリ、アシシロハゼ、ジュズカケハゼの5種類のハゼが産卵していることが確認されています。下流部では、秋から冬にかけて、たまにマハゼが見られますが、このハゼは、湖内では産卵せず、もっと塩分の濃い下流部（おそらく利根川河口域）で産卵すると考えられています。

湖内で産卵が確認されている5種類ですが、ジュズカケハゼについては、天然域での産卵を確認したわけではなく、飼育実験により産卵、ふ化させた稚魚と全く同じ稚魚が採集されたことから、湖内（流入河川を含む）でも産卵していると考えられるのです。

これら5種のうちジュズカケハゼをのぞく4種は、湖底（ヨシノボリでは流入河川の川底）の石や貝殻の下側等に産卵します。ウキゴリは空き缶の内側を産卵巣として、ヌマチチブは湖岸の矢板やコンクリート壁等にも産卵し、飼育水槽内で適当な産卵巣が無い場合には、水槽のガラス表面などに産卵することもあります。

ここでは、水槽内での観察を基に、ヌマチチブの産卵行動について少し詳しくお話します。ヌマチチブは、産卵期である7月頃、比較的平らな石や貝殻などの下を掘って空洞を作り、そこを産卵巣として確保するオスが出てきます。このオスはほぼ全身が黒くなり、頭部の白い斑点がはっきりとしてきます。さらに、頭部全体に青紫色の小さな点が沢山出てきます。この小点は光を反射し、きらきらと光り大変きれいです。この時期、ヌマチチブは巣の中や周辺にいて、時々身体を裏返しにして、天井にくっつき、身体をくねらせて、あたかも卵をくっつける場所を、尻鰭と尾鰭で掃除しているかのように見えます。

テリトリーを作ったオスは、周辺に別のオスが近寄って来ると、背鰭を立て、あごの下を膨らませて威嚇します。これで相手が離れていけばいいのですが、相手が逃げない場合、さらに全身の鰭を立て、口を開き、身体を大きくうねらせるなどして相手を威嚇します。このとき「グー、グー」というような声を出しています。それでも逃げないと相手に噛みつきます。これで、どちらかはこの場を去ることになります。水槽などで飼育している場合、この負けた方が隠れる場所があればいいのですが、そのような場所が無い場合には、常に勝者に追い回され、ついには死んでしまうこと

になります。

さて、この巣の近くにメスがやってくると、オスは身体を低くして近寄り、犬が吠えているように口をぱくぱくさせます。水中にマイクを入れてみると、実際に「クン、クン」という声を出しているのが聞こえます。まだ、産卵準備ができていないときは、メスはそのまま去ってしまいます。産卵準備が整ったメスは、オスの声に反応して体色が薄くなり、ほとんど肌色に近くなります。そして、オスについて巣に入り、天井に卵を生み付けていきます。産卵が終わったメスは、そのまま巣を去りますが、オスは巣に残り、卵を外敵から保護をするとともに、鰭を動かして、新鮮な水を卵に送るなど、卵がふ化するまで世話をします。

ヌマチチブの卵は非常に小さく、1mm位の電球型で電球の口金に当たる部分で付着します。卵が小さいため、ふ化仔魚も小さく、ふ化直後何を食べているのかよくわかっていません。ヌマチチブは卵の形が電球のようですが、霞ヶ浦で見られるハゼ類の卵は、むしろ細長くナスや真空管のような形をしています。いずれもへたやソケットの部分で、基物に付着するようになっています。

次に、ジュズカケハゼの産卵を見てみましょう。ジュズカケハゼは細長い身体をしており、ウキゴリとよく似ています。メスの最大体長は7cm程度、オスはもっと小型です。ジュズカケハゼの産卵期は3月頃です。以前は、5月から6月にかけて大量に若魚が出現し、同時期にほぼ同じ大きさで出現します。ジュズカケハゼは、産卵期になるとメスが婚姻色を表します。婚姻色は尾鰭と胸鰭をのぞく各鰭が黒くなり、体側部の黒色横縞の間が濃い橙色になります。頭部は、下面から腹鰭にかけては真っ黒です。オスはメスよりも小さく、体色がなくなり肌色に近くなります。

産卵期になると、オスとメスが対になります。オスが湖底に産卵のための穴を掘り、その中に産卵します。オスは口いっぱい底泥をほおぼり、穴の外へ運び出します。穴は直径が約1cmで深さが12cm位あります。オスが産卵用の穴を掘っている間、メスは周辺にいて他のメスが近づくと背鰭、尻鰭および尾鰭を大きく広げ、腹鰭をたて、さらに、下あご部分を膨らませて、自分をめいっぱい大きく見せ、他のメスが近づくのを阻止します。また、オスが穴掘りをやめると、同様の形になり、自分の体を大きくうねらせてオスに近づき、まるで穴掘りを急がせているように見えます。オスが穴を掘っている間、メスは時々中に入っていきますが、すぐに出てきてしまうので、穴が完成するまでは産卵をしていないようです。産卵が終わると、メスは外に出てオスだけが産卵巣に残ります。オスは自分の口だけを残して、巣穴の入口をふさぎます。おそらく、穴の中に、外部の新鮮な水を送り込むためだと思います。ふ化仔魚はすぐに遊泳し、動物プランクトンを捕ります。若魚期まで湖の表中層を泳ぎ、あまり湖底にはおられないようです。成魚になっても湖岸付近の湖底と中層を泳いでいます。

近縁のビリンゴでは、他の生物が掘った穴なども、産卵巣として利用するようですが、ジュズカケハゼは産卵巣を自分で掘るので、底質が堅すぎず柔らかすぎず、砂質では崩れてしまうなど、産卵場は細かい条件が必要です。近年は、この産卵巣を作る条件に合った場所がほとんど無くなってしまい、数が激減したものと考えられます。

(パートナー 中村)

「私の細道」(その17) 白河 関山

芭蕉一行が白河の関跡を目指しつつ泊った「旗宿」を発ったのは、元禄2年4月21日(陽暦6月8日)朝、霧雨が降っていた。宿の主人に教えられた関跡らしき所を捜した後、北上して、「関山」に参詣したと曾良の随行日記にある。芭蕉自身の「おくのほそ道」にはこの辺りの記載は無い。



白河の関は、古代大和政権が北の蝦夷侵入の備えとして設けられた関であるが、平安中期には既にその機能の必要性は失せ、廃止されていた。以後、白河の関という名前は歌枕としては残ったが、その場所も定かでは無くなり、芭蕉の時期にも、種々の言伝えや噂に過ぎなくなっていた。芭蕉が旗宿の宿の主人から聞き訪れた現「白河神社」の他に、奥州道中（国道294号）沿いの「境明神」も有力な候補地であった。芭蕉らは白河を経て、須賀川で滞在する事になるが、その滞在先の俳人相楽等躬（とうきゅう）からは、奥州道中の東側を通って旗宿に至る東山道の国境にある「追分の明神」が古関跡であると告げられる。更に、芭蕉らが知らずに登った「関山」も古関跡との言い伝えがあった。芭蕉らは4候補のうち、3箇所は訪れたことになる。

さて、平成26年10月30日、白河神社を見た私は、それから北上し、「庄司戻桜」として知られる「霊桜之碑」（源義経に従事した佐藤継信・忠信出立の地）を見た後、芭蕉と曾良が登ったという「関山」を目指した。標高600m程度の低い山であるが、独立峰で種々の謂れがある。曾良の日記に因ると、「行基菩薩開基、聖武天皇御願寺、正観音、成就山満願寺、弘法大師、真言宗」という言葉が並んでいる。

関山の入口に碑があり、そこで地元の人（矢内文一氏）に出会った。「満願寺は頂上にあり、その車では行けない、登るのに歩いて小一時間掛る」という。行くと2時間は必要かと躊躇していると、4駆車に乗った人（穂積英雄氏）が来て、これから車で山に登るのだという。「乗っけて貰え」と言われ、同乗。ガタガタ道を頂上へ。頂上には満願寺社殿、鐘撞堂等があり、立派なお寺である。かつては修行僧が大勢いたそうだが、幾度も火事に逢い、今は無住の寺となっている。地元の人達によって守られているとの事、3月末には芋煮祭で賑わうそうだ。眺めは良く、那須連山を遠望できる。左手には富士山が頭を出す事もあるらしい。穂積氏は山で仕事があるらしく、帰りは徒歩となる。猪や蝮がいるぞと脅され、びくびくしながら素走りで降りた。

曾良の日記によると、霧雨の中を白河行の途上、芭蕉らは山頂まで登り参詣したとある。二人の健脚なるを実感した。麓に下りると、関山の名の入った安全祈願のお札が私の車のワイパーに挟まれていた。近所の人に問うて矢内氏宅に向かうと門口に立っておられた。礼を言い、山頂で穂積氏からは是非行くように言われた「硯石の観音」への道聞き、地元の地図を頂いて向かった。山辺の岩に掘った観音像があり、所有者は「穂積某」とあった。楽しいひと時であった。

また、曾良の随行日記に戻る。一行は、更に北に向かい、白河城下へと入って行く。松平忠弘13万5千石。白河藩は伊達藩など奥羽外様の押えとして重要な親藩譜代が配置されたが、農民の反発やお家騒動で再々入れ替わっており、この当時も危うい状態ではあった。

白河城下では、中町の左五左衛門を訪ね、大野半治なる人物にも連絡したとあるが、詳細は不明。左五左衛門には、小袖と羽織を黒羽へ返却するを託したと記されている。白河の関を越えるに当たり、故事に習い衣冠を正す為に、黒羽藩城代家老浄法寺桃雪から借りていたのであろうか。

芭蕉らは白河城下を抜けて、次の目的地である須賀川に向かうが、その道程の矢吹の宿で一泊している。須賀川滞在中に、芭蕉は白河藩士で俳人の何云宛てに手紙を出し、会えなかったとの文が残っている。城下を素早く抜けたり、藩士に手紙を送るなど何か意味ありげな気もしないではない。

曾良の日記には、須賀川で相楽等躬から聞いた話として、白河の「人忘れずの山」「二方ノ山」「うたたねの森」「宗祇もどし橋」の説明が記載されている。「人忘れずの山」と「うたたねの森」は歌枕の地である。

私もガイドブックを見たり、人に訪ねつつ、これらの史跡を辿ったが、地元の人もさして興味もなく、古びた言伝えのみが残るところとなっていた。

（パートナー 小松）

●霞ヶ浦を舞台にした映画作品の紹介●



「花蓮」と題した地元茨城を舞台とする”ご当地映画”が今話題です。幼馴染で仲よしの彼女をもつ一人の若き青年は、霞ヶ浦のレンコン農家を継ぐことに両親から覚悟の程を疑問視されていました。そこに突如現れた一人の留学女性に青年は心惹かれます。男女間の葛藤に苦悩・翻弄され、慕情に拉がれながらも後継者として奮起、成長していく姿が一つの愛の顛末としてよく描写されています。毎日見慣れている霞ヶ浦ですが、実はそこには複雑な社会問題や人間模様が……。湖畔のさわやかな風景が映画のところどころにシーンとしてよみがえってきます。この作品は好評につき映画館での上映期間が延長されており、また夏には行方市でも上映の予定です。機会があれば鑑賞を。映画を通し新たな視点から地元を再認識することができるでしょう。

(パートナー 新関)

◆平成28年度の新規登録 新パートナーのご紹介◆ (新たに力強い人材の賛同がありました)
丹治 真哉(たんじ しんや) パートナー

編集後記

◆最近の話題からあれこれ◆ 関東鉄道の路線バスが当センターまで乗り入れ、テレビでは楽しいバス旅番組や、またアクシデントで騒がれるなど、何かとバス話題の多いこの頃。諸行事にはセンターの専用バスが活躍します。そこでこれを機に、センターでお馴染の大ベテラン、小池清司運転手さんに心得を(洗車の最中)お聞きしました。まず「無理をしないこと」、「急ブレーキをかけないでスムーズな停車を」、そして「ギアの変速に気づかれないように」と。安全で楽しく快適な車内のひと時にとのことでした(今後もお世話になります)。ところで海の幸には身肉



きれいに洗車され
ピカピカになって待機するセンターのバス

のとれる大型・中型の魚介が多いですが、水郷の幸には小型の魚介(雑魚)が多彩です。煮干や佃煮は骨やレバー、皮まで丸ごと魚を食べ切る、高栄養価で、煮汁以外は廃棄物でないエコロジー伝統食。霞ヶ浦は「一物全体食」を絶え間なく生み出し続けるフィールド。ひとの口に入るものを育むとの視点でも湖沼を見守りたいもの。2016年2月20日のフェスタに参加の、黒海(Black Sea)沿岸の都市バルナから来邦中のブルガリア婦人曰く、「水産物の恩恵を受けている地元黒海を大切にしたい・・・みりん?をきかせた霞ヶ浦の甘露煮は美味しい!」とのこと。その折皆で作成し、来場者に驚嘆された丹治真哉さんオリジナルのフナのペーパークラフト(タイトル)、神谷美穂さんのアレンジした綿入れ姿でカエルを抱いている受付のクマくん(タイトル)、そして写真の土肥奈津子さん製作のリアルな折り紙のバラ(福山・川崎・一分・佐藤の各ローズ)をご紹介します。編集委員の土肥さんは図書館司書の資格で5年間に渡り2階の図書ルームに勤務され、この間数多くのアート作品を手掛けられました。丹治さんは魚のペーパークラフト以外にも、鋳型で形作る樹脂製の水生生物製作技法など各種のテクニックをもって新風を吹き込んで頂きました。編集委員の上野夏実さんを含め3人の方々は転出・退職となりました。お疲れさまでした。



とれる大型・中型の魚介が多いですが、水郷の幸には小型の魚介(雑魚)が多彩です。煮干や佃煮は骨やレバー、皮まで丸ごと魚を食べ切る、高栄養価で、煮汁以外は廃棄物でないエコロジー伝統食。霞ヶ浦は「一物全体食」を絶え間なく生み出し続けるフィールド。ひとの口に入るものを育むとの視点でも湖沼を見守りたいもの。2016年2月20日のフェスタに参加の、黒海(Black Sea)沿岸の都市バルナから来邦中のブルガリア婦人曰く、「水産物の恩恵を受けている地元黒海を大切にしたい・・・みりん?をきかせた霞ヶ浦の甘露煮は美味しい!」とのこと。その折皆で作成し、来場者に驚嘆された丹治真哉さんオリジナルのフナのペーパークラフト(タイトル)、神谷美穂さんのアレンジした綿入れ姿でカエルを抱いている受付のクマくん(タイトル)、そして写真の土肥奈津子さん製作のリアルな折り紙のバラ(福山・川崎・一分・佐藤の各ローズ)をご紹介します。編集委員の土肥さんは図書館司書の資格で5年間に渡り2階の図書ルームに勤務され、この間数多くのアート作品を手掛けられました。丹治さんは魚のペーパークラフト以外にも、鋳型で形作る樹脂製の水生生物製作技法など各種のテクニックをもって新風を吹き込んで頂きました。編集委員の上野夏実さんを含め3人の方々は転出・退職となりました。お疲れさまでした。

(パートナー 新関)